

**修士論文概要**

ASD 児の保護者に対するビデオフィードバックを用いたペアレント・トレーニングの効果 —親子のスキル獲得と心理的ストレスとの関係について—

増淵 昌子

**1. 問題の所在と目的**

神経発達症児・者に対する支援において、その親を支援する形態にペアレント・トレーニング（以下、PT）がある。PT の効果としては、親の子育て行動が改善することで子どもの行動変容を促せる、親自らが子どもの行動を改善できるようになることで、親の子育てに対するストレスや自信の改善につながる事があげられる（神山,2018）。

PT の提供方法に階層的モデル（McIntyre & Phaneuf,2007）がある。これは、支援ニーズに対してリソースを最大限に活用するための3つの階層からなる段階的方法である。その中の第3層では、大きな問題が起きている対象に個別的で集中的な支援を提供する。ASD 児に対する PT の多くは第3層の個別型で実施され、食事や排泄などの家庭生活スキルを標的とする家庭生活中心型 PT が多い（神山,2018）。また、家庭においてビデオ撮影を行い、それを元に PT を進めるビデオフィードバック（以下、VF）を併用することで、保護者自身の客観的な振り返りを促進することが指摘されている（上野・野呂,2012）。そのため本研究では、家庭生活中心型 PT を VF の手続きによって行なった。

また、ASD 児の保護者は他の障害児をもつ保護者に比べ養育のストレスが高いことが知られている。しかし、個別型 PT では集団型 PT と比べると保護者の心理的ストレスの研究はほとんど行われていない（原口ら,2013）。

そこで、本研究では PT によって子どもの標的行動とその際の保護者の関わり方がどのように変化するのかを明らかにすることを目的とした。また、その過程で、保護者の言動、育児負担感やコーピングスキルがどのように

変化するのかについても検討した。

**2. 方法**

**(1) 参加者:** C 大学において、発達相談を受けていた ASD の疑いのある2名の児童とその保護者が本研究に参加した。なお、保護者には本研究に関する説明を書面と口頭で行い、研究協力を依頼し同意を得た。**(2) 標的行動:** A 児は「ズボンをはく」、B 児は「箸を使って食べる」とした。**(3) 手続き:** **1) BL 期:** 保護者にビデオ撮影を依頼し、書面と口頭でビデオ撮影方法について教示した。**2) 介入期**  
**①レクチャー期:** 保護者に、上野・野呂（2012）を参考に、適切行動に関して口頭と書面を用いて教示した。教示の内容は、(a) 目標行動の課題分析、(b) 目標行動に対する強化子の提示、(c) 環境調整・プロンプトの提示方法についてとした。**②VF 期:** ビデオを保護者と支援者が一緒に視聴し、支援者は保護者に賞賛や助言をした。**(4) 従属変数:** A 児は、基準変更デザインを用いフェイズごとに達成基準を設定して評価した。子どもは、目標行動の自発遂行率を求めた。保護者は、適切行動の生起率を求めた。また、開始時・講義後・終了時に、質問紙（KB PAC・障害児育児ストレス認知尺度・ストレスコーピング尺度）を実施した。さらに、保護者の発言をポジティブな発言とネガティブな発言に分類し、その発言数の推移について比較した。

**3. 結果**

A 児と保護者の結果を図1～5に示す。子どもと保護者の行動の生起率は、A 児は VF 期後半に増加した。保護者は介入直後に増加し VF 期後半で安定した。B 児と保護者の生起率は、VF 期後半に安定した。障害児育児ストレス認知尺度の結果は、A 児の保護者はレ

クチャー期に「育児に対する否定感情」が減少し、VF 期に「児に対する拒否感情」が減少した。B 児の保護者は、VF 期に「育児に対する否定感情」が減少した。ストレスコーピング尺度の結果は、A 児の保護は VF 期後半に「問題焦点型」が増加した。B 児の保護者は「情動焦点型」が減少したことにより、VF 期に「問題焦点型」が相対的に増加したと考えられる。KBPAC の結果は、二人の保護者は VF 期後半に得点が増加した。子どもに関する発言は、二人の保護者は VF 期にポジティブな発言が増加した。

#### 4. 考察

二人の保護者は、レクチャー期には短縮版の講義を受けることにより、環境調整を行うことや強化のバリエーションを増やすことができた。VF 期には、VF によって養育上の実践のスキルを学び、タイミング良くプロンプトや強化ができるようになり適切行動の生起率が増加した。その結果、子どもの自発遂行率は増加した。A 児は、フェイズごとの達成基準を達成し、VF 期後半で自発遂行率が急増した。B 児は、VF 期後半で左手を出さずに箸で食べられるようになり、自発遂行率が安定した。これらのことから、短縮版の講義と VF によって短縮版の講義は確立操作として機能し、VF が弁別刺激となり保護者の適切行動が生起したことが示唆された。また、保護者が子どもの関わり方を変えることで、子どもの目標行動の自発遂行率が増加することが示唆された。

また、二人の保護者の育児ストレスは VF 期に減少し、ストレスコーピングは、VF 期に「問題焦点型」が増加したと考えられる。さらに、二人の保護者の子どもに関する発言は VF 期にポジティブな発言が増加した。この発言を見ると、子どもの目標行動の自発遂行率が増加したあとに、「問題焦点型」の発言、子どもを肯定的に捉える発言が生起していると考えられる。これらのことより、子どもの

自発遂行率が増加することによって保護者に心理的な余裕が生まれ、保護者と子どもとの間に肯定的な相互作用が促進され育児ストレスが減少することが示唆された。

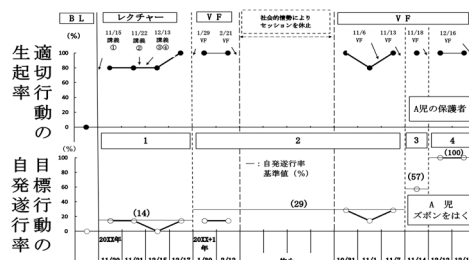


図1 A児と保護者の行動における生起率の推移

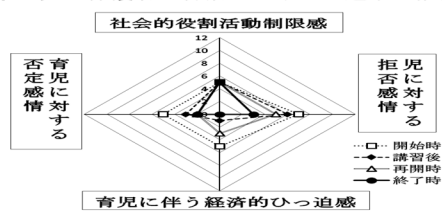


図2 A児の保護者の障害児育児ストレス認知尺度の結果

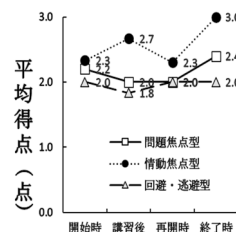


図3 A児保護者ストレスコーピング推移(平均得点)

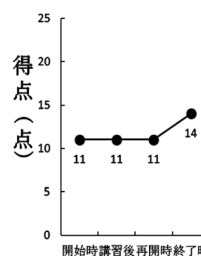


図4 A児保護者KBPAC推移

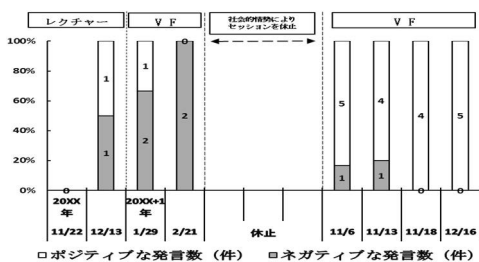


図5 A児保護者ポジティブ・ネガティブ発言数の推移

#### 5. 主要引用文献

原口英之・上野茜・丹治敬之・野呂文行(2013). 行動分析学研究, 27(2), 104-127.  
 神山努(2018). LD研究, 27(3), 365-372.  
 上野茜・野呂文行(2012). 障害科学研究, 36, 69-80